
あふたあいめえじ

粒子分解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あふたあいめえじ

【Nコード】

N2960N

【作者名】

粒子分解

【あらすじ】

特無しですはいすみません。

プロローグ

目の前に広がる光景。

そこには見たことのない異形な怪物（？）どもが蠢いていた。

非日常な光景。

目を塞ぎたくなるような惨劇。

飛び散る、鮮血。臓器。

それを際立たせる悲鳴。——断末魔。

ここは何処だ。理解できない。

今のこの現状はなんだ。理解できない。

パニック

パニック

ガタガタ震える足、手、肩。眼球。そして、心臓

（落ち着け……落ち着くんだ。これは夢だ。これは夢なんだ。）

必死に自分を保とうとした。

しかし、その願いは虚しく、落ち着くどころかさらに心拍数は上

昇していく。

バクン、バクン……

今俺は、走っている。必死に走っている。聞こえてくる悲鳴。それから逃げるように走った。

視界が映しているのは、異形な怪物。

灰色の空。大地。海。

色の褪せた世界。

ここは「内なる世界^{インサイド}」と呼ばれる場所。

異形なる怪物たちが住む世界。

俺の名前は神薙^{かんなぎ} 緋炉^{ひいろ}ひよんなことからインサイドに飛ばされた。
今から前日談（？）を話すから。

——インサイドに飛ばされる2日前。

俺はK高校に通う、至ってフツーの高校生だった。いつも通りの時間に起床して、いつも通り登校して、いつも通りな、アイツ（お友達）らと戯れて、いつも通りの授業受けていた。（いつも通りじや何も勉強でけへんよ？w）そんな日常。

ありきたりな会話。止むことを知らない周囲の喧騒。飽き飽きとした平凡。——現実的な日常。

俺はその日の朝もいつも通りの時間、7時に起床した。（アラームとか無しだぜ？凄いだろ？）いつも通りキッチンに足を運んで、父さんと母さんに「おはよう」っていった。

なんか、細かく言ってるけど…今はひどく懐かしいんだ。

そのあとはいつも通りのやつらと学校に登校した。ガヤガヤと他愛もない会話、朝だって言うのに。迷惑なこった。

会話の内容は、先日に行っていたアイドルの特集。生憎だが俺は、アイドルとか興味なかったんだ。大人数でいるのが嫌いだし。しかもそれがワツサワツサ動いてるなんて……想像しただけでへどが出そうだ。

「なあ…悪いんだけど俺アイドル嫌いじゃん？」

はい、考えようと思ったけど、こういうのって空気をぶち壊すのが一番じゃん？みんなわるいけど壊すね」

「ワツサワツサ動いて気持ち悪いし、別にみんなかわいくないじゃん。」

本音つてさ吐いたら吐いた分だけすつきりするよね？（笑）ハイ——同黙れえ。

「……………」

黙らすことを成功した俺は、一つの提案を出す。

「つーことで、今から学校までダッシュ！びりは今日のお昼おごりな！！！」

と、叫んで、俺は一目散に猛ダッシュ！

「「つちよ！ヒイロずるいぞ！？」」

みんなが遅れてから走り始める（みんなって言っても、俺を含め三人だけだな）

「びりはおつごり」

ちなみに俺の、脚力はクラスで一番だ。

「ヒイロに追いつくとか…無理だろ…！！？」

一同（二人ここ、大事。）

「「ヒイロ、まてえええええ！！！！！」」

馬鹿どもが俺を追いかけている（二人ね。）

すこし息を切らしながら校舎に飛び込んだ。8時。まだ日直の先生たちも外に出ていない。俺はこの時間が好きなんだ。大きく息を吸って、酸素共を吸入する。スーッと鼻の奥が冷たくなる感覚。肺が満たされていく。酸素の吸いこみすぎで頭が少しくらつとした。アイツらはまだ来ない。

俺はだんだんジンジンしてきた足をさすりながら上履きに履き替えた。

階段を駆け上がると……誰もいなかった。そのまま俺は教室へ直行した。

誰もいない、教室。

俺はいつも通り教卓に突っ伏した。

ガコン。

今思えば、いつも通りの生活をしていたことを後悔した。まあ、進行進行。

「……………ん？アイツラもう来たのか？今日は早いな。」

しかし、周りを見渡してもそこには何者の姿もなかった。

「……てか、教室に入った時の音がガコンてw」

深くは考えないで、目を閉じようとした。

——ミエル？ミエル？——ミエル？——

明らかに声がした。みえるって。声がした。

そういえば、つい最近話題になっていた。【SEE】（見る）という化け物が居るとか居ないとか。

そういえば夏場だっていうのにひんやりしてたなこの学校。教室。廊下。階段。

ミエル？ミエル？ミエル？

………何この超展開。ついていけません。

俺は閉じようとしていた目を無理やりにかっ開いた、というか、そうせざるを得なかった。本能的につてやつ？…いや本能だったら逃げただろうに…。

「ミ…ミエ…ミエル？…ミエルッ！？」

俺の眼前40センチほど前に（PCから目を離す距離）口が裂けたように笑った怪物が居た。

俺は、体を動かせようとした。けれども体中の筋肉が引き攣ったように動かなかった。

眼前の化け物は依然として「ミエル？ミエル？」と聞いている。

噂では…確か返答してはいけない。はず。「返答しなければ大丈夫…返答しなければOKOK。」心で念じ続けた。

化け物は、目なのか何なのかわからないものをこちらに向けていた。多分眼孔だ。眼孔の中にうつすらと青い光が見える。その青い光に俺の姿が映し出されていた。まるで人の眼球のようだ。それに俺は見とれてつい声を漏らしてまう。

「……あ、」

とつさに口をふさいだが遅い。手遅れだった。

「ミエタ…！」

そいつは口をcaff開いて高らかにそう、叫んだ。

その音は、俺の現実の終わりを意味していた。

始まり

俺はいつの間にか気を失っていたようだ。起きるとそこには、アノ化け物は居ない。

いつもの教室……いや、まだおかしかった。頭上の時計を見上げると、教室に入った時から一ミリたりとも長い針は進んでいなかった……どーゆーこーとー？夢？ナイナイ。心配だったから一様耳を引っ張ってみた。……うん、当たり前前に痛い、つか強く引っ張り過ぎた。「おい、」

何処からともなく声がまた聞こえた、しかしそれは先ほどの怪物の声のものではなかった。ちゃんと人間のそれだった。その声は耳のすぐ横で聞こえた。

「なあ、おいってばいつまでアホ面書いてんだテメエ、いい加減見あきたよ。さっきの変なのもういないからサッサと起きろよ。うぜえ……」

第一声がこれ。(→)俺の第一印象がこれ。(←)

(……)何でキレてんのこの人、俺なんかしてる？つか、アホ面って何だよ……。至って真面目だよ、状況についていけちゃって冷静な顔してる奴の方がおかしいよ……つかあんなもんみて驚かないって何なんだよ……。なんなんだよ。(↑脳内愚痴り。あ、因みにおれ愚痴り症あります。)

「……へ？」

1テンポと言わず、2→4テンポ位経ってからやっと返した言葉がこれだよ。(→)

「……。」

無言、しばし無言。て言うか無音。

静まり返った教室に(元から)止まった時計、耳元の声。先ほどのバケモノ。かみ合わない話しと急展開ならぬ超展開。ついていけ

ません。助けてください英語で言うところのすみません。

「おまえの記憶を消す。だからこっち向け」

こっちってどっちよ……明らかに耳元から声してんだけど。ねえ近いつてば、ねえつてば！いきなり記憶消すとかってさあ……メイエン。ラックじゃあるまいしさ。

と、刹那（なんかとりあえず入れておくとカッコよく見える、聞こえる単語。意味はセツナだよ。）俺の目に手が覆いかぶさった。皮のグローブでも嵌めているのだろうか、しっとりとした感触が顔を包んだ。

「良いからこっちに向け！」

首を無理やりに動かされ、当然痛がる俺。しかしその痛みも軽く吹っ飛ぶくらいに俺は仰天した。

俺の目の前に、俺が居た。うんそれは鏡に合わせたような俺だった、髪型を除いて。

「ん？なんだデメエ俺の顔になんかくついてるか？まじまじみてんじゃねえよ、とっちまうぞこらあ！？あああん！？」

……済みません（↑意味も無く謝る）

呆然、啞然、どちらにもあてはなるような現状の俺。（要するについていけない。）

なんで怒ってるか、理由を一行でいいから言ってほしい。

「あの、済みませんが今の状況を説明してただけませんか？……」

……さつき変なバケモノが居て……」

「それは後回しだ、先ずはお前の記憶を……あ、それじゃだめじゃん。二度手間じゃん。なんで記憶消したのに話すんだよ（笑）」

急に笑い始めてもこっちでは受け答えに困るっす。つか、マジ似てる。俺と。何双子？……俺兄弟居ないわw（妹は居る。）

「……………」

返す言葉を見つけれなかったので無言。てか、返しても怒鳴られそうなのがした。

「……………」

お前も、無言かよ。

「え、と、だな。さっきのバケモノは見なかったことにしろ。OK？」

いや、知りたいからきいたんだけど…。

怒鳴られそうな予感が消えないが、言われてばかりじゃ男がするの俺は反論(?)することを決意。現在の日本男児諸君。草食、草食、って逃げてばかりじゃいけませんよ。(関係ない。)

「あの、良いから説明してください。後々記憶消すんだったら今言たって何も変わらないでしょう？ほら早く言っちゃってください。」

若干引け腰。敬語と言うか丁寧語。実はこれでも番格張ってるんです。(勘違いで。)

「ん？ああ…へえ。」

うつぜー！？なんだコイツ？折角人が考えたのに…上の空かよ。と、心の中で井戸に叫びつつ

「上の空ですか？」

つい、口が滑ってあら、本音が転がった。良いもん、たまに無謀なくらいが男だもん。

「……ふう。いいだろう。話してやる。その代わりお前はブレイカーズになってもらう。」

…もう、驚くことを止めました。(これが人生での一番のミスメイク)

「ブレイカーズってなんだ？バンドか？」

「……ブレイカーズ。それはさっきの化け物どもの退治屋だ。いわば…退治屋だ！」

ひねれなかったんか！考えろよ！頑張れよ！できるよ！やれよ！

「はあ…」

「因みにここはもう終わった場所だ。もうここはワールドに存在していない。」

「はあ…？」

「つまりはだ。ここ。この場所は無くなってしまった。この世界から、存在が、記憶が無くなってしまっている。さっきのバケモノはドッペルゲンガーと呼ばれている。記憶を消すということは、この場所を今知ってしまっている矛盾から取り外すため、世界に害を及ぼさないために。」

「はあ… やっぱついていけないよ。急過ぎるよドッペルゲンガーって言うのがさっきのバケモノってことは解った。…それで？この場所が無くなっているってどういうことなんだよ？存在してないってどういうことなんだよ！？」

ついていけなくなった、突き放された。先ほどのことまでは良いでしょう。

意味が解らない。この場所は無くなった？（二回目、大事なんではあ？

「ここは勝手ながら戦場バトルフィールドになったんだ。俺らだって好きでここを消した訳じゃない。… ああ説明メンドクサイ。こういうのが居るから嫌なんだよな…」

俺は考えるのを止めた。身投げした瞬間ってこうなるのかな。

「お前はもう、元の世界にはいない。その世界が無いからな。ドッペルゲンガーはバケモノじゃない。もう一つの世界インサイドに存在しているソイツ自身だ。そして空間そのものももう一つある。世界の浸食。」

「……」

「理解できてないのは解ってる。… 時計が止まっているのが解るだろ？この場所の崩壊を意味している。ここはもう戦場だ。バトルフィールド。よかったな、幸いにもそれが及んでるのはこの校舎内だけだ。」

話している間に気づかなかったが、ソイツは俺の目の前に居なかった。何故気づけなかったは解らない。もう嫌だ。

ついさっきまで、俺は学生だった。

「うそだあ……」

「残念、事実です！。良いか？まださっきの奴は生きてる。この校

舎に居る教員は捕食されている可能性がある。お前は気づかれないような場所で――」

言い終わる前に廊下側の方から爆音が鳴り響いた。壁が重力を無視して浮いている。

そいつが現れた。

「ミエ…ミエ…ミエル？」

アイツが叫んだ。爆音とほぼ同時に俺はよくそれを聞き取れなかった。けれども本能と似たようなものに支配されて、俺は全速力で駆けていく。……バケモノの身体が紅くなっていることは見えなかったことにした。

俺は走り続けた。

はじまり 2 (前書き)

特
に
な
い
で
す。
駄
文
で
す。
は
は

はじまり 2

俺は、廊下を走っている。後ろを振り返ると重力を無視した動きをしていたアイツとバケモノが居た。

あり得ない。まるでゲーム世界の主人公の動き。スタイリッシュ！とかいう吹き出しが出てきそうだ。

にしてもあのバケモノ図体の割にはアイツに引け劣らないほどの俊敏さ……。何この解説。

俺は後ろに回した視線を前に戻し、また走り始めた。

ああ、くそ、なんでよりによってこんなところで戦わなくちゃいけないんだ。また、変なの紛れ込んでるし、学校来るの早いよ。うぜえ。よりによってA級ゲンガーかよ……。なんで局長の俺がこんなこと……。今日はINチャンネルで、俺の好きなアイドル番組。「眼鏡っ娘」があるっていうのにさあ……。なんなの？

あーあ、しかも数体でええくせにはえーしよ、こいつ【SEE】じゃねえのか？……………ちげえな。

最近ここ（ファーストサイド）で連続猟奇殺人がはやってて、「みえるーみえるー」とかなんとか、報道してたから、てつきり「アイサイト」系のゲンガーかと思ったじゃねえか、それだったら雑魚中の雑魚だったのに。だって攻撃方法が目くらましたぜ？何ができるってんだよ。一瞬「わあ、目がー目がー」ってなるだけじゃん（笑）

あ、コイツの能力分かった。【GRAVITY】（重力）系だ。周りを反重力にして……がれきをふっ飛ばしてたのか、道理で動作の振動が無かったわけだ。音があつたらすぐにハチの巣にしてやった

のに……わざわざ喧嘩売るようなことしやがって。舐めてんのか？
こいつらに考える脳なんかねえか！

「俺」は腰のガンホルスターから銃を取り出した。たしかこの国
じゃじゅっけんほー？だっけそれに引ッ掛かって使用できないんだ
よな。戦場になっバトルフィールドてて、若干よかつたかも。

攻撃を避けつつ銃を構える。標準を合わせようと試みるがすばやくて、合わない。うざい。

俺は攻撃を避けるのを止めた、面倒だから。標準を合わせようと
努めた腕を下ろした。理性がある奴から見ればただの挑発。けど、
これが挑発なのは変わりないか。

「ミ、ミエル？ミエルー！」

【GRAVITY】（グラビティ）能力。反重力地帯を生みだし、
物体を地球の重力から反発させ、それを射出する。……反発。英語
で「Repulsion」その他、大嫌いと言う意味も含む。…な
んか意味ずれてるな。……【REJECTION】（レジエクシ
ョン）意味は拒絶。うし、かつこいいからこれにしろ。

「てめえの、名前は今日から【REJECTION】だ。経った今
からこの世から消えるけどな！」

俺は脱力させた腕を振り上げる。俺の挑発にまんまと掛かってく
れたバケモノ（レジエクシジョン）は、ちょうど銃口を口にした。

「あばよ。」

ズガン！

銃声と共に、【REJECTION】はモザイクのようにはじけ
飛んだ。そして、モザイクは収縮していき、「俺」の手元に収まっ
た。ジジ

『——アビリティを取得。能力名【GRAVITY】（重力）。コ
ード名【REJECTION】（反発）に改名しますか？』

「おっけーっと。」

『アビリティの取得及び、改名完了しました。データをアップロー

ドします。』

「はいはい。」

ん？なにやってるの？これはね、データを作ったんだよ。これで能力のストックが…誰に話してるんだろ「俺」……………。

ま、いいや。

終わった終わった。これで帰れ……アイツつれてかなきゃいけないのか…もう、INチャンネル見れないじゃん…。そういえばさっきの…誰か食ってたみたいだな。

ん？なんだこれは……山田花子…？職員の名前か。ご愁傷さまでーす

「俺」は見て見ぬふりをしてあいつを探すためにそこを後にした。

なんだったんだろう。あれは、けど先ほどまで聞こえていた音はもう聞こえない。どうやら終わったようだ。随分と速いもんだ。まあ、終わったならそれでいいか……「アイツ」が終わってたら…。

俺は考えることを止めた。

俺は、中央玄関を目指した。

ホームにいるうざい友 - 1 (前書き)

はい、ここから本筋です。駄文にならないよう頑張ります。なんか前半変な感じですが、ただ単に書くのが面倒になっただけです(え別に全部回想書いちゃったら意味ないと思うし(なぜ
あ、ちなみにサブタイはマイナスじゃなくてハイフンです

ホームにいるうざい友 - 1

とまあ、こんな感じだったけかな？俺と「アイツ」の初めての出会い。最悪、っていったら最悪のほかの何でもない。本当に。

けど、そんなおかげで俺は今ここ。インサイドにいる。つかこつちにいないとシュリーヨー？おしまい？終止符？^{ヒリオド}すべてがおしまい？まあ、結果だけ言うとうこうの世界はすべて戦場と化してしまっただけですよ。

……過去の話はここでいったん切る。

今現在の話をしませう！（説明不足はなかったていうことで。）

『ハンター：ホーム 緋炉の部屋』

神薙^{かんなぎ} 緋炉^{ひいろ}年齢は16、高校二年生。髪は黒。（当たり前だ！）瞳は琥珀色、いわゆる狼眼ってやつ。（ちよつと自慢）身長は……170くらいだといっておく。趣味は空を眺めること、音楽を聴くこと。

ちなみに番格も張ってはいる。（不本意。マジ不本意。）

俺はいま、「内なる世界^{インサイド}」と呼ばれる場所にいる。この世界はメインサイド、現世の中にある。地球IN地球、みたいなそんな感じで。こんな話を現世でしたら、笑い話だな。「地球の内側ってマントルとか、コアがあるんだよ（笑）」ってな感じで、まあ、そういう頭のタリ^{タリ}ン奴らの考えじゃ浮かばないんだろうな。

詳しく説明すると、現世と「内なる世界」は別の世界にあるもので、しかし地球の体内に位置しているから、地球IN地球？みたいな？

……説明下手ですみません。

んで、俺が今ここで何をしているかっていうと、えーと狩人やつてます。ハンターですね。はい。モ。スターハ。ターみたいな感じの、クエスト制？ってやつ。

報酬ははつきり言うとなーい。無い。無い。しかもリタイアもない。受けたらクリアするかゲームセツトしかない。そ、ミスったら死んじゃうよ？ってこと。

よいこの諸君。人生に、リセツトも、ポーズも、セーブもないんだぜ？わきまえて生活しやがれ！こちとら、毎日を生き抜くので精一杯だ！

ツーわけで、今日もミッションに励んできますよ。と

緋炉はバトルスーツをホームから取り出した。

狭い部屋にはかすかにそれがこすれる音だけが響く。彼は独り言の激しさとは裏腹に、悲しげな表情を浮かべていた。それは表面上を取り繕ったような、内に秘めた思いを無理に隠したようなそんな表情だった。無理もないのだろう。彼はすべてを失ってここで生きているのだから。

『ハンター：ホーム 000サイド ラボ連絡通路』

「よう、緋炉昨夜はよく眠れたか？ちよつと顔色悪いぜ？」

話しかけてきたのはホームの住人の野々村^{ノノムラ} 洋太^{ヨウタ}。国籍はもちろん日本人。身長は残念ながら緋炉より高い。年は同じくらい。若干緋炉は眉間にしわも寄せる。理由はもちろん身c h『禁則事項です』

。……身長がひー！（ゴー！

『地の文は倒れた▼』

ザ。リク！！（これ、平気かな？

『地の文は復活した▼』

緋炉は何に気を害されたか、更に眉間を刻んだ。

「……原因はお前かもな……。」

「え？なんだって？」

ぶつぶつ緋炉は心の怒りを出していた。眉間がすごいことになった。かも。

「まあ、いいか、そうだからミツシヨン受けるんだろ？」

「ああそうだよ。」

抑えきれない感情が声音に漏れ出している。ぼわあ。

「ちょうどいいや！マーケット寄るんだったら。いつものあれ、買ってきてくれよ。」

野々村は口元で手をグイグイと飲み物を飲むジャスチャーをする。顔は若干にやけて気持ち悪い。表情から察するにお酒のようだ。

野々村は齡、16歳にして結構なアル中。あ、ちなみに「内なる世界」では未成年の飲酒は制限されているという制限がありません。よって飲んでもよし（実際は飲んじゃだめだからね

緋炉はそのジェスチャーで事を察し、呆れ顔で答えた。

「この……アル中が……」

野々村は聞こえていないのかこう続ける。

「んじゃ、頼むわ」

緋炉の肩をたたき、どこかへ消えてしまった。

「野々村……コロス！」

さすがに言葉には出さなかったが、表情に出ているので意味をなしていないかった。

緋炉はあきらめ、ルームを移動した。顔はすっかり血の氣を戻した。

ホームにいるうざい友 - 1 (後書き)

ふう・・・実は内容が頭でもまとまっていって。。。

ホームにいるうざい友 - 2 (前書き)

はい、こんな駄文読んでる人いるわけない。
心が俺そう。

ホームにいるうざい友 - 2

『ハンター：ホーム 000メインサイド セキュリティシステム』

「ふう……マーケットによるのは後でいいか。」

緋炉は独り言をつぶやいてから眼前にある、テレビのような機械に手をかざす。ピピという音が飽和し、

『本人認証を行います。名前とコードを入力してください。』

「神薙 緋炉。コード：0/0（ゼロスラッシュゼロ）」

再びピピという音が機械から発せられ、

『本人確認中——名前識別成功。音声識別成功。本人確認完了しました。』

緋炉は機械から手を離し、ドアを開けた。

一見、重厚な壁のような扉だが押しただけで開く（笑）

眉間からしわの消えた緋炉の顔はあの少し寂しげな表情に戻っていた。

瞳をつむったその目じりには何かが光ったような感じがしていた。

『ハンター：ホーム メインサイド 任務受付所』

「やあ、神薙くん！お元気かなあ？元気じゃないねえ表情的にい？」

このうざい語尾の伸ばし方。……ええと、誰だっけ（緋炉は名前が覚えられない。）まあ、いいか。誰でも。

けど、学校にもこんな奴いたな、死んだけど。虐めで。理由はもちろん声質と語尾が鼓膜に強姦未遂罪（いや、されてるのだけれども）なので、いじめの対象に。というよりは、自業自得（理不尽な）

？

「……おまえ、名前なんだっけ……」
ぽつりとつぶやいた。独り言しかし彼女の耳には届いていたよう
で、

「あんたねえ！？いつになったら名前覚えるのよ！！」

僕の耳がレ。プされました。ねえねえ、神様、神様、こいつ殺し
てもいいですか？それが僕の鼓膜戻してくれませんか？

悲痛なる心の叫び虚しくも届かず、ただただ、耳を抑えもだえる
緋炉。（笑）

痛みが引いたようで、でも耳を抑えたまま。

「忘れちまったんだからしょうがないだろ。」

「あんたがここにきてからどれだけ立っただと思ってるの！？一日
二日とかだったら許すわ、けどね、毎日会ってるし、もう半年くら
い経つんだからいい加減に覚えなさいよね！」

「……………」

あ、思い出した。この逆レ。プ娘は確か…

緋炉は脳内を検索開始した▼

『私の名前は兎奈^{ツナ}、豊鐘兎奈（ホウガネ　-）以後お見知りおきを。

』

はい、回想タイム終了。思い出せたこと、以上。

「思いせたぞ、ツナ」

「よくできました。（怒）」

「……………前から言ってるだろう…名を覚えるのは苦手なんだ」

「そういう問題じゃないでしょうが！」

耳に指を突っ込み、今度からはこの人の名前を覚えよう、あと、
耳栓も所持しよう。そう固く心のルールを増やした緋炉だった。（
たぶん、守る気は0）

「まあ、そんなことはどうでもいい、今日のミッションはなんだ？」

「あんた…名前は覚えられないのに、あたしが何やってるかは覚えてるのね。」

「ここはそういう場所だって、体が認識してるからな。」

「じゃあ、あたしもあんたの体にあたしの存在を叩き込めば覚えてくれるのかしら？」

兎奈は緋炉を睨みつけ、だがどこか期待するようなまなざしで見下した。

「おいおい、そんな表情するなよ。こわいぜ、結構。神薙ちゃん泣いちゃいますよぉ」

「……。」

「………すまん。」

実は自分でも謝った理由がわからない緋炉であった。
しばしの沈黙、。。

「今日のミッションはね、廃墟となったワールド4の病院…の中に住み始めたC級ドッペルゲンガー4体の排除ね。あんたいつも通りチームなんて組む必要無いでしょ？ソロで行ってらっしゃい。もう、ポータルなら開いてるから。」

「うい」

「返事はハイよ！」

「んじゃ、行ってくる」

「………いつてらっしゃい。」

この二人、何かありそう。今さっきのやり取りとか計算してそう。なんかできてそう。く中略、リア充爆発！

以上、地の文からの突っ込みでした。

ホームにいるうざい友 - 2 (後書き)

うん。そっだよ。リア充なんだよ。

ちきんにきょうみねえ（前書き）

はい、意味不だけど。自己マンってことで

ちきんにきょうみねえ

さつき、誰かから中傷された気がするんだが……気のせいかな？

気のせいです。

そうなんですか？

そうです、気のせいです。

英語で言つと？

Wood Spirit。

なにそれ、知らないし。つか、なにその直訳。きもいし、意味わからん。死んだほうがいいよ？

……はい、すみませんですした、調子のりすぎました。ごめんなさい。

わかればよろしい。全然問題ない。

さあ、本題に戻りましょう。戻りましょう。

OK。

ふう、ようやく撒いた、別に忘れてるわけじゃないんだよな実はただ、あいつに似てる気がしたから……いつもああ弄ってるんだやつて。あいつを思い出せるから、昔の記憶が薄れないように。

俺は、ポータル^{ポータル}の光に手をかざした。そうして、いつも通りに右手を後頭部に回して、

「じゃあ、いつてくるわあ、ツナ」

「さつきも言つたよ。」

人差し指と中指ををピツと上に向けた。

ポータル^{ポータル}の光が緋炉^{ひいろ}の体を包み、やがて緋炉の前身は光の中に消

えていった。

ブウン

『俺は悲しみの中に生きてるんだ、何もかも失って、スベテを壊されたんだ。未来も、今も、過去も……』

ふと、緋炉の脳内流れた一つの記憶、もう、誰が言った言葉か、誰に言った言葉忘れてしまった。まあ、思い出す理由もないのだろうかもしれないのけども。

「えーと、どこだっけワールド4の病院か、てか、ポータルの転送なんだから、目の前のこれか。」

緋炉は一人虚しく自分自身と会話をしながら装備を確認し始めた。「今回の、クエストの支給品は……ダラダラダ〜（ドラムロールのつもり）」

目の前に現れたアタツシケースに手を伸ばす。サイドにつけられた、ロックを外して、ガタン、大きな音ともに……

「てててーん」

すっからかんだった。

「は？」

緋炉は隅々をくまなく目を配った。どこか隠しボタンでもないのかとアタツシケースをたたきまくった。けれども、そんな努力もむなしく結局は何もなかった。

「……あんのくそアマ……なめてんのかよー!!」

せつかく人がいいこと思ってたのに！ふざけやがって！と、怒鳴り散らし、地団駄を踏みまわった後、アタツシケースを病院の扉に向かってブン投げた。

ボガン!!!!!!!!!!!!!!

アタツシケースは派手に爆発した、あの小さなアタツシケースに何が入っていたんだろう。仮にもしもあれを所持したまま転ん

だらと思うと……緋炉は大げさにブルブルと震えた。

そう、大げさにだ。

ハンターたちが着ているこの黒いスーツは、味方からの攻撃を受け付けないようにできている。

素材は不明。どうやって作られたかはハンターたちは知らない。

これに感謝するようなそぶりをして緋炉は、病院の中に足を踏み入れ行った。

『ワールド4 廃病院』

「なんだよ、そこらじゅう吹き飛んじまって、穴だけじゃねえか。かあつ！ここで何やったんだよ？銃撃？爆撃？戦争でもやってたのか！？」

緋炉はいつものように、虚空へ怒鳴り散らす。まったく、子供のようだ。

ゲンガーの気配はいまだ感じない。

緋炉は徘徊という名の搜索を続ける。

目の前に広がるのは、穴だらけになった壁。銃弾、爆撃でもされたかのような跡がある。

足元のタイル張りの床は埃の海になっていた。そのために足音は響かない。

床を見つめていた緋炉だったが、天井を見上げて少しおかしいところがあるのに気付いた。

天井に、明かりは灯っていないのに、光がさしているように妙に中は明るいことに気付いたのだ。

「……。」

緋炉は耳を澄ましてみる。しかし、やはり床の埃のせいもあってか、まったく音をつかめない。

「…おいおい、これ結構——」

ガン！！！

意の外側からの不意打ち。緋炉は何の行動にも移れず、何者かからの攻撃をストレートに受けてしまう。

「うがつ…」

辛うじて、受け身だけはとれた。

しかし、鈍い痛みが体中を駆け巡った。

「……くつ、効いたぜ！こいつわよお！！」

緋炉は怒鳴った。

体制を立て直し、あたりを見渡す。

「…！？」

何もいない。

きよるきよる、あたりを見渡す。しかし、やはり何もいない。

「くそ、こんな奴初めてだ……。姿が見えない…グラフィック背景系か？」

ガン！

再び緋炉の体に衝撃が走った。

勢いよく吹き飛び、壁に激突した。

緋炉は、よろけつつも、体制を立て直す。後頭部が濡れていた。

どうやら、頭を切ったらしい、すでに、額は鮮血に染まっていた。

それを右手で拭くと、左腿のホルスターに手を伸ばした。

「……いい度胸だな。不意打ちばっかなのはチキンの証拠だけだな！！」

ホルスターから拳銃を抜いた。

緋炉のはなった怒声は、薄暗い病院内を掻ける。

「ギギ……ギギギ！」

突然、目の前にゲンガーが現れた。

こちらに飛び掛からんばかりの大勢だ。

兎のような顔、脚。けれども、大きさは人間のそれとなんら変わらない。

「やつと、出てきたな！こいつは不意打ち一発目の分だ！」

ジャキ！

緋炉は、化け物に照準をあわせる。

だが、それは、すー、と薄闇に溶けてしまった。

「とことんチキン…だな。ったく」

はあ、とため息を吐くと、緋炉はその場に座り込んだ。

『ナンダアコイツ？ナメンテンノカア？ギギ、ギギ』

『ギギ……ハハ、ヤツチャロヤツチャロ』

そして、大きく酸素を肺へ循環させ、ゆっくりと目をつむった。

ちきんにきょうみねえ（後書き）

ねみい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2960n/>

あふたあいめえじ

2010年10月16日06時52分発行